東方大東亜禄

魂魄武尊

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

１９３４年、天皇陛下が行方不明になり、代わりに魂魄家の長女、魂魄妖夢が天皇となる。

これは、人類が銀河に出る前の、子孫たちの生きた、時代の記録である。

目次

序章、対中戦
第一話、その時、時代が変わった。
1
第二話　対馬要塞と第五軍団結成
1 ―――― 6
第二話　対馬要塞と第五軍団結成
2 ―――― 13
第三話　対中戦　1 ―――― 22
第三話　対中戦2 ―――― 29

序章、対中戦

第一話、その時、時代が変わった。

１９３４年［皇紀２５９４年］１０月２５日のことである。

昭和天皇は、国事行為を終え、寝床につくところであった、ちょうど９時くらいだったか、

しかし、何時もの時間は、今、終わりを迎えていた。

１９３４年１０月２５日２１時３５分　　皇居、宮殿が爆破され、天皇陛下を含め、三百人が行方不明となった。

この事件は、後の赤軍の変と呼ばれることとなるが、それはまた後の話だ。

その一日後の２６日、日本共産党、［コミンテルン日本支部］の残党だった者達が、爆破された皇居、

並びに国会議事堂を制圧する事件が発生、制圧後、首謀者の一人が「我らの敵！天皇は、我らの自由の炎により駆逐された！　さあ日本人よ！　平等の為に立ち上がれ！」と声明を発表した。

しかし、その声が国民の耳には届かず、むしろ、日本人の敵という扱いとなった、

その数時間後の午後５時２０分　近衛第一師団、第二師団が皇居、陸軍第一師団が議事堂に到着し、大規模な戦闘になった。
この戦闘ハ、二時間に当たる戦闘で

皇居戦
近衛第一師団↓２名死亡　１９名負傷
第二師団↓６名死亡　２６名負傷　に対し
赤軍↓４００名死亡　１名重症
国会戦　第一師団↓３０名死亡　１００名負傷に対し
赤軍↓１０００名死亡　２名重症デアッタ。
これにより、赤軍残党の首謀者は即決の裁判で処刑
さらに、逮捕されていた佐野学などの人間も、同時に［事故死］した。
そして、ソ連、共産圏のスパイ、辛抱者の取り締まりを四日間開始し
結果、３０日までに６万人の人間が［行方不明］となった

そして二日後の１１月１日
天皇陛下がきえて数週間行方不明のままであったことから、死亡となり、

天皇陛下の分家にあたる、魂魄家の長女　魂魄妖夢が天皇に即位することから、この物語は、始まる。
そもそも魂魄家には、ひ弱そうな軍人の長男がいた。
名は魂魄武尊［こんぱくたける］身長が普通の、そして少し腹が出ていて、見た目からは、到底軍人とは思えない
ほど優しい顔をしている人間である。
しかし、見た目よりも凄い人間である。　その一見無害に見えることから、陸海空にかなりの人脈があり、
全軍の人事を担当したり、補給計画や大規模侵攻戦を考えたり
自分で編成した　第五軍を指揮し　つねに活躍してきた。
それ故に彼は「私のような軍人が天皇になったら戦場で指揮が取れないし、あまり市民にはすかれんだろう、
それだったら、国民に愛される妹に任せてもいいと思うんだが」と言い彼は辞退した。
そして、今回辞退した兄に代わり天皇になった魂魄妖夢についても語らなければならない。
魂魄妖夢は、伯爵家の従者として、暮らしてきた。
伯爵家の当主は　　少し半人前の従者と語り

妖夢を見てきた市民たちは　　人一倍責任感が強く、優しい少女と語る。
だが、兄はそれとは別の姿を見ていた。

兄は彼女を　　［常に最善な判断ができ、第三者の視点で軍を動かせる者　］と語った。
何故彼がそのように語ったのかは、当時は不満であった。しかし、それが後に判るようになるには、
あと数十年は、かかるとおもわれる。
しかし、柳条事件などが起こったこの時代において、テロによる天皇陛下行方不明、そして新たなる女性天皇
の誕生は、世界に、新たなる変化をもたらすことになるなど、この二人には、まだわからない話であろう。

そのころ、ドイツのハンブルクには、金髪の１６歳の少年が、空を眺めながら、考え込んでいた。
その少年は、自分の祖国に絶望していた。
自分たちの国が生活が厳しいのは、無能な政府のせいだ、ユダヤ人のせいだ！　とい

うこの時代において、

このような青年がいることなど、余り珍しい事ではなかったが、この青年は違った。

彼は、蒼氷色［アイスブルー］の瞳には、この世界がどう見えているのか、、それは誰にもわからない。

しかし、この青年もまた、時代を動かす人物になる者であることをまだ、誰も知らない。

第二話　対馬要塞と第五軍団結成　1

「はあ、面倒くさい、これだから軍部はいやだ。」

そういって、魂魄武尊は、対馬を改造し建設した、龍田鎮守府の個人部屋でブランデーを飲んでいた。

この鎮守府は、他の鎮守府とは違い、対馬のすべてを鎮守府とし、

中ノ島やどの湾内に、造船所や、軍港のほとんどを置き、北部、南部の海岸は、民間用の港や漁港がある地点を除き

すべてに要塞を建築し、かのシンガポール要塞より硬く、強い要塞となっていた。

１９３７年、五月一日　妖夢が天皇となり、昭和から、東方に元号が変わり、早三年たった。

この三年間、財閥の一部解体、軍の再編が行われていた。

これは、当時の軍の暴走を抑えるのと同時に、各軍団の補充や、指揮系統統一などの目的があった。

これによって、あらかたの軍団が完成した。

まず、近衛師団３師団を含む、３０師団の第一軍　軍団長は、飯田義明元帥である。歳

は６９

その容姿は、前線での最古参軍曹、といった感じで、若い士官たちからは、「おっかない親父さん」と呼ばれているが、面倒見がよく、部下たちからは、「おじいちゃん」と呼ばれている。　軍団長の前は、近衛総督を務めており、

３年前の事件で重傷を負い、皇居爆破テロでの失態の責任を取ろうとしていたのを魂魄武尊や部下たちに止められ、

第一軍軍団長に就任した。

続いて、朝鮮方面　満州方面守備を目的とした　第二、第三軍

第二軍には１０師団　第三軍には、戦車師団三師団と二十師団　この部隊で対ソ戦で圧倒すると軍本部は言っていたが、

正直一進一退の攻防になるだろう、ちなみにまだ指揮官が決まっていない。

そして、中国北部に駐屯中の二十師団の第四軍　　軍団長は、松尾一馬［はじめ］大将である。

歳は、５９で、その容姿は若干更けてはいたが、常に全線で指揮を執っていたことから、前線の将兵たちからの信頼は厚かった。

そして、彼が率いる第五軍には、

陸軍師団３０師団、装甲戦車部隊１０師団　戦車師団１２師団　砲兵師団　６師団

特務装甲兵団　２０００名
海兵隊３師団　と、豪華な編成であった。
しかし、第五軍団には、ほかの部隊も入れられた。
まず、陸軍航空隊　３部隊にエースパイロットである赤坂謙信　武田信康　後藤建夫
今川茂雄が派遣されている
そしてさらには、潜水艦部隊の三分の一と戦艦三隻　空母三隻　重巡洋艦４隻　軽巡洋艦４隻　駆逐艦１５隻
が送られてくるらしい。
流石に武尊も過保護すぎて困るのか、単に面倒くさいだけなのか、各軍の本部に減らしてくれと頼んだが、
「無茶イワンでください、本来であったこの倍の数を当たらせたかったのに、陛下に止められて、妥協して
この数なんだ。」と言われ。断れなかった。
しかし・・・この数の部隊を中将が指揮するとは・・・嫌な予感がする。
そう考えながら彼はブランデーを飲んでいた。少し良かったのは、彼が人事の担当をしていたことで、
士官は、自分で選ぶことができたことだ。

まず、艦隊の副司令官として、水雷戦隊として奮闘した司令官　浅井鎌［れん］少将を選び、
首席幕僚には、独創性には欠けるものの、繊密に整理されタ頭脳を持つ、村井元就少将　次席幕僚には
海軍の軍人にして、精鋭の陸軍陸軍大隊を格闘戦でなぎ倒し、部下たちの憧れの的である　安藤兼続准将を、
それぞれ任命した。
村井には、常識論を提示してもらうため、作戦立案と決断の参考にする。
安藤には、兵士たちの　咤激励役を引き受けてもらい
浅井には誠実な艦隊運用を、というのが魂魄の意図である。
続いて陸軍だが、
まず歩兵師団総指揮官に攻防どちらにも優れていると評判な江島三郎少将　その参謀に黒田翔次郎大佐を
戦車師団総指揮官には、磯井優作　参謀には飯村有大佐を
装甲戦車部隊総指揮官には中橋旭日少将　参謀には平沼一郎大佐を
砲兵師団総指揮官には、白孫湯［ハク，ソンヨン］少佐　参謀にイン、チョンウン大尉を

そして、特務装甲兵団団長には、陸軍一の剣豪と呼ばれ、何度も敵対した国家から、ラスト、サムライと呼ばれた
薬丸忠勝大佐を招集した。
そして航空隊総指揮官兼参謀長には、清で生まれ日本に亡命してきた貴族で、
軍大学で同期達に、常にパンを食べているところから［パン屋の二代目］と呼ばれていたが
陸軍航空隊の中では、全ての［航空機のことを一番よく知っている］と呼ばれている指揮官
チェン、ウー、チェン大佐を招集した。
ここまでは順調に事が進んだのだが、副官の人事に苦戦することになった。
まず、自身がリクエストした士官は、余りにも優秀で、別の地域に派遣すると言われて却下され、
逆に他の者からのリクエストは、すべてが華族であって、優秀かと言えば、それほどでもないため断り、
その結果、全然決まらなかったのだ、
武尊は、自分がこの部隊に配属される前に人事部本部長の後任にした魂魄牙太郎に
「とても優秀な若手士官を」

と頼んでおいた、

魂魄牙太郎もとい毛利牙太郎は、かつて日露戦争で、戦艦八島に登場し、父である、毛利秀吉とともに戦地に言っていた。しかし、明治３７年）５月１５日、ロシア海軍が敷設した機雷により戦没したときに父を失い

一人みになったところを魂魄家の人間に引き取られたという経歴がある。

ちなみに、武尊とは、数か月年上だが、兄として慕っている。

「１９３３年度、次席卒業、よかったな兄者！兄者より優秀やぞ！　今の所属は、大本営作戦本部情報分析家勤務

」と連絡が入ったのだ。

武尊の前に現れたのは、ショートカットの黒髪の頭髪　優しさの中に鋭さを踏まえた瞳を持つ美しい若い女性で

深緑色を基調とした単純なデザイン軍服までが可憐にみえた

武尊は、メガネをかけ、彼女を見つめた。

「藤井美博［みひろ］大尉です、今回魂魄武尊中将の副官を拝命しました。

それが彼女の挨拶だった。

武尊は、メガネをかけなおし、心の中で、牙太郎は、とんでもないものを押し付けた

な　と思った

彼女は、日本の英雄　アドミラル・フジイ　　東洋のネルソン　と呼ばれた。藤井平八郎の孫娘であり、

驚くべき記憶能力の保持者として知られていた。

このように第五軍は編成された。

そして、副官が着任したと同時に送られた文書が、また武尊の頭を悩ませるのだった。

第二話　対馬要塞と第五軍団結成　2

１９３７年、五月一日　彼は副官が持ってきた文書に、頭を悩ませていた。

彼に送られてきた文書には、「特務艦隊新型旗艦級戦艦１隻　新型空母２隻　補助艦計画」とかかれていた。

計画の内容は単縦で戦艦一隻と空母二隻は、こっちで作ってほしいのと補助艦もできれば開発して補ってくれっということだった

ここまでだったら頭を抱えることはないのだが、問題がその希望だ

戦艦〔８．２万トン級戦艦　速力４０ノット　武装５６ｃｍ５０口径３連装砲　大型垂直墳進弾　対空砲１００基以上〕

空母Ⅰ〔６．６万トン級　飛行甲板２７４．５×４０００．００ｍｍ　甲板装甲１５０×３０ｍｍ　航続距離３．７００海里

速力３６ノット　武装　高角砲２０問

機銃９０丁　墳進砲　爆雷　搭載機１００機＋偵察機４機〕

空母Ⅱ〔６．７万トン級　飛行甲板３００．００×４２００．００ｍｍ　航続距離３．７００海里　甲板装甲　１８０×４０ｍｍ

速力３４ノット　高角砲２４問　機銃４５丁　墳進砲　搭載機１０５機〕
という内容であり、この鎮守府で、そして莫大な要求を４年・・つまり１９４１年までに完成させろという内容だった。
龍田鎮守府には、湾内にある造船所以外に地下にも存在する。　元々は、軍艦を敵航空機から守るためや、潜水艦を守るために作った地下ドックであったが、そのあまりにもでかすぎたために、実際４分の１しか使用していない
ここであったら機密が漏れることない、そして、彼にはこの兵器らを完成させる方法もすでに持っていた。
それは二年前、１９３５年までさかのぼる。　１９３５年７月１５日に魂魄武尊は、外務省の人間と共にシベリア鉄道を使い、ドイツ首都ベルリンで交渉をしていた。当初の予定では金３トンで七十八件の工作機械などの購入が目的だったが、武尊は、得意の人脈を使い、ユダヤ人コミュニティから金３トン分の希少金属を購入し、ロケット技術　ガスタービン機関　真空管　など追加で４２件の研究資料、特許権　現物などを購入した。
この時ユダヤ人コミュニティーからの要望で、ユダヤ人１６人の亡命させることになったが、その十六人のほとんどが科学者で、その中には、ロケット　レーダー　ガスタービンなどの専門家である。

ユダヤ人の頭脳と地下ドック、確実に、世界にバレることなく完成させることは可能であろう。と彼は考えていたが、そんなことよりも、この軍艦たちを4年以内に竣工させなければならないことであった。

しかし、一応は軍令であるため、何としても間に合わせなければならない、おそらく、造船技師や研究者などには、かなりの負担をかけてしまう。　そんなことをかんがえながら、彼は関係者に指令書をわたしにいくのだった

。

三日後・・・独立艦隊への配備させる予定であった、戦艦　伊勢、日向　空母　加賀　重巡洋艦最上　三隈　古鷹　那智

軽巡洋艦　北上　大井　長良　阿武隈　駆逐艦　暁　響　雷　雷が対馬、浅芽湾に到着した

旗艦代理　伊勢艦長　飛鳥　仁少将以下人員の着任を確認した武尊は、龍田鎮守府要塞司令部　司令官室で

全艦の配置変更をしていた。

「提督！　コーヒーをどうぞ」

小川、安秀［やすひで］がコーヒーも持ってやってきた

「すまん安秀、、ちょうど飲みたかったところだった。」
「艦隊の配置、そんなに大変なんですか？」
「まあな、」
「全部、地下ドックに入れればいいんじゃないですか？」
「安秀、、そんなことをすれば、地下ドックの存在がばれてしまうだろ？　、だから数隻はの押さなくてはいけないんだ」
「つまり、その　残す船　で迷っているんですね？」
「まあ、そんなところだ」
　安秀少年は、武尊の披保護者で、十五歳になる。身長は年齢より少し小さく　黒色の頭髪とダークブラウンの瞳
と繊細な容姿を持っており、魂魄牙太郎などからは、「武尊のお小性」と呼ばれている。
　安秀少年は、六年前　軍事子女福祉特例法　によって武尊の披保護者となったのである。
　日露戦争後　戦争のために多額の借金も重なり、遺族年金が払えない部分が発生したことにより
　多くの戦争孤児が発生した。　　このため当時の政権が、多くの戦争孤児の救済と人的資源の確保を目的とした

この法律を定めた。

孤児たちは、軍人の家庭で育てられる。一定額の教育費を政府が出し、孤児たちが15歳　になった際

軍に志願すれば、教育費は免除され、逆にそれ以外だと、払わなければならないのである。

軍隊にとっては、女性であっても、後方勤務に欠かせない人的資源であり、経理　補給　輸送　通信管制　情報処理

施設管理にも必要なのだ。

「要するに、中世の子弟制的なものを想像すればいい。いや、もっと悪質かもな。金銭で将来を縛るのだからな。

」

当時、後方司令本部に所属していた仁は、そう皮肉をたっぷりに説明した。

「しかし、人というのは、エサがなければ生きていけない。これは、まあ、事実だ。　で、エサを与えるには飼育員が必要なのだが、あんたにも引き受けてもらいたい。」

「私は家庭持ちではありませんが。」

「だからや、妻子を養うという社会的義務を果たしていないんだ、教育費も国が出すし、

いい加減これくらいのことは、やってもらわんとな、ええ、独身貴族」
「はいはい、ワカリマシタ　ですが、一人だけですよ」
「なんならもう一人増やすか？」
「イヤ、ヒトリデジュウブンデス」
「そうか、なら二食分食うような奴を探してくる。」
両者の間で以上の会話がされて、四日後　安秀少年は、武尊宅の玄関の前に立っていた。
安秀は即日、武尊の家の中に自分の位置を確保した。
それまでに武尊の宿舎の唯一の構成員は、有能勤勉な家庭経営者とは程遠く、玄関からリビングまでゴミ駄目になっており、もはや人が住めるところではないと思った。
安秀は、まず自分自身のためにも、家庭の物質的環境を整備しようと決断したらしい。
彼は、まず、武尊がよく閉じ籠る部屋以外のチラシやら、軍事機密などを集めた。
つぎに、チラシや役に立たないものをまとめて捨てた。
これによって、たった半日で部屋すべてを方告げた。
この時若い当主は、いつも道理仕事をしてきて、たった半日で清潔と整頓の連合国に支配された我が家を見て
文句の一つでも言おうと思ってやめ、「紅茶を一杯たのもうかな」と言った。

武尊が言ったのは、好きな紅茶で喉を湿らしてから苦情を言ってやろうと思ったからだが、キッチンに跳んで行った少年が、新品同様に綺麗になったティーセットを運んできた彼の目前でインド産の茶をいれた。

その手さばきに驚いた。差し出された紅茶をすすって、彼は少年に降伏した。それほどに香りも味もよかったのだ

。

安秀の亡父は、陸軍大尉だったが、武尊以上の茶道楽であり、息子に茶の種類や入れ方を伝授していたのだという

。

武尊が安秀少年式の家庭法を受け入れてから半年後、チェスをやりに来た仁が室内を見わたして論表した。

「有史以来、お前さんの屋敷が初めてきれいになったな。親が無能なら子供がちゃんとしているというのは本当らしいな。」

武尊は反論しなかった。

以来六年、安秀の身長もかなり伸び、少し大人っぽくなっていた。

そんな昔のことを思い出しながら、コーヒーを飲み干すと同時に、ドアがたたかれた音が聞こえた。

入ってくれっと武尊が言うと同時にいきよいよく扉が開き、見知った顔が現れた。
「ああ、マダム、幽々子のご亭、ゴホ、ゴホ、、、ああ、飛鳥先輩殿」
「後輩という自覚があるのなら、今何を言おうとしたのかな？　武尊殿？」
「まあ、気にしないでください。、、で何があったんですか？」
「弾幕が薄い」
仁が言おうとしたことは、現在の艦隊の対空能力の危惧であった。
現在の艦隊では、駆逐艦などの補助艦が足りず、次に戦争が起きれば大損害になるので駆逐艦の増量か軽巡&重巡の対空強化を要請しに来たのだ。
これに対して武尊は、「問題ありません」と答えた
そして武尊は、現在極秘に軍備増強が始まっているのでしばらくしたら駆逐艦も増えると付け加えた。
それを聞き納得して出ようとした仁だが、出る瞬間に書類が入っていると思われる封筒を武尊に投げ渡した。
これは？、と武尊が聞くと仁は一言
「　伊勢　日向の改装案だ！　軍備増強のついでに考えておいてくれ」
そう言い残して彼は座乗艦である伊勢に戻った。
彼の渡した改装案には、四番　五番砲塔を廃止し、更に艦尾を延長させ　飛行甲板を

載せるという案である
搭載機は、新型の水上機で名前は強風というらしい　どうやら仁はこの時のために裏で何かしていたのではないかっと思った。
まあ、何がどうであれこの改装案なら旧式戦艦の活躍の幅が広がるのでよしとしよう・・・　と武尊は思った。
そこから約二か月後の７月１２日に、第一回目と称して新たなる軍艦が竣工した。
竣工した船は、特務艦として建造された　島風型駆逐艦１隻　と対空戦闘用駆逐艦として秋月型駆逐艦　秋月　照月　　初月　　若月　霜月　の５隻
そしてあらかたの船体と全部甲板に噴進弾垂直発射機４８問が完成した艦名がない戦艦が一隻である
ようやく戦艦の武装のテストが出来ると武尊は喜んだがそれと同時に副官が勢いよく扉を開けて　緊急事態です　と言った。
武尊はめんどくさそうに内容を聞いた。
その内容とは以下のことである「大本営発表！　本日７月１２日我ガ帝国ハ、中華民国トノ全面戦争ヲ開始セリ！」
武尊は、嫌な顔をしながら　全軍に戦闘準備　と命令した。

第三話　対中戦　　1

「ふざけるな！」

妖夢は机を殴り、そう放つと　　自室に閉じこもってしまった。

この話の始まりはいまから5日前の　7月7日に遡る。

7月7日正午　正確にはそれくらいの時間帯にある青年らが話をしていた。

「おい、見ろよ！　日本兵だぜ！」と左の青年が話すと

「今日も軍事演習か…　それも中国の領土［我々の土地］で」と右の青年らがしゃべっていた。

そしてしばらくすると左の青年がモーゼルＣ９６というピストルを手に取り

「なあ、奴らに一発喰らわせてやりたいと思わないか？」と言う

右の青年が、お前正気か？　　と言うと左の青年が

「大丈夫、バレやしない　奴らに一矢報いるチャンスだぞ？」

そう言いその青年は引き金を引いた。

これが当時近くにいた中国人からの証言である。

しかし当時　現場では様々な憶測などが飛び回り　とんでもないことになってしまったのだ。

それにこの時の銃弾が当たらなければ　ただの誤発で済んだのだろう。

しかしその弾は、演習中の田中少尉の胸に当たり　少尉は死亡した。

これが発端となり日中は盧溝橋で全面衝突することになる。

最初は有利に進んでいた日本軍だが、盧溝橋を突破したあたりで膠着状態となった

日本側は、すぐに撤兵し、講和しようとしたが、中華民国　総統　蒋介石は、徹底抗戦と総動員　日本側に満州　朝鮮半島　台湾　九州の割譲と

天皇一族　華族　の処刑　全日本国民の奴隷化を要求した。　これに対して妖夢がブチ切れて現在に至る

事実上　大陸と戦争に突入した日本の陸海軍参謀本部では、いかに前線を突破して4カ月で降伏させるかで会議していた。

各参謀らは北京からの中央突破　畑俊六［はた　しゅんろく］陸軍大臣もそれに賛成したが　一人の後方担当　人事部本部長の魂魄牙太郎大佐

の発言により、会議は二分することになる。

「満州領内に後退し、遼寧　遼東方面に建設されていた。旧要塞を二週間で復旧させ大陸にいる全陸軍で食い止めて時間を稼ぎ

稼いでる間に　第五軍団を北京に強襲上陸し、敵兵を包囲し、殲滅　　第五軍団と温存させた機動部隊で各都市を電撃的に占領する方が

我が軍の被害を最小限にし、的に大損害を与え　　早期終了が目指せるぞ」

魂魄牙太郎がこの時発言した作戦である　　この作戦を使えば確かに早期終了させ被害を最小限に抑えることができるが、

敵側が食いついてこないかもしれない　　満州の国民の避難はできるのか　　そもそも第五軍団が上陸に成功する保証があるのか

そもそも要塞を二週間で完全再建することなど不可能だ　　という理由で半分の参謀から反対される。

そこから6時間たち、なかなか決まらない作戦に対して陸軍大臣は、現在参謀本部長である　　妖夢陛下に決めてもらうとして

妖夢陛下の閉じこもった部屋の隙間から作戦である2案を入れ　　どちらにするか決めてくだされといい陸軍大臣は参謀本部に戻った。

1時間の後　妖夢の決断が発表された。　　妖夢は牙太郎大佐の案を採用し、そこに修正してできた案を発表した。

妖夢の修正案には、まだ牙太郎大佐が書く予定であった補給線　付近の民間人の避難

にかかる最短時間　　1日でどこまで要塞を補強するか、
軍団の逐次撤退　の日程　第五軍団の適切な上陸場所の指定　　満州航空隊の爆撃支援の日程　　本土爆撃隊の運用　連合艦隊による海上封鎖
などなど多数の事を増量された作戦に各参謀は驚いていた。
今まで実戦経験もない小娘が　これほどの作戦を立てるとは、思わなかったのだ。
この後すぐに作戦を実行することになる。
一週間後　作戦の全貌が決まり実行が開始された。
まず第四軍団の半師団が敵前線に食い込もうとして失敗したふりをする、この時被弾した者は実は藁でできた人形で
日本軍の制服を着せ一人二体持たせ少し掘った溝から突撃した。　その結果　中国軍は　敵6万人を撃破という戦果が上がり
中国軍全体が慢心することになる［無論撃破したのは　日本軍の制服を着せた藁人形だが」
その間に日本軍は後方支援していた砲兵、補給部隊など後方支援部隊の撤退を2日で成功させ、さらに作戦を短縮させることに成功した
そしてその6時間後の7月16日午後18時に魂魄武尊率いる第五軍団に作戦指令が届いた。

指令は二つで、一つは陸上航空隊による第四軍団残存部隊撤収支援
もう一つは第五軍団による
天津上陸作戦であった。
この指令を見た魂魄武尊は、少し口を緩めたのちすぐに戻り　安藤に全上級士官をすぐに集めてくれと頼んだ。
２時間後、全士官が席に着いたところで会議が開始された。
まず最初に航空参謀兼隊長のチェン大佐が「我が航空部隊を総動員すれば、撤退作戦は成功致します。　現在の我が軍の戦闘機を増槽を乗っければ、敵前線にでれます。その後爆撃完了次第、大連の飛行場に着陸し補給後に基地に帰投するのが定石かと思われます」
と、最初の指令に対し成功すると断言した。　それと同時に
「しかし、次に行われる天津上陸には間に合いません。　間に合ったとしても全体の四割くらいしか発進出来ないでしょう」
と言い天津作戦の援護はほぼ不可と宣言した。
これにより陸軍からのもう少し航空機の数を増やせと言う意見と航空参謀のこれ以上減らせば作戦は失敗すると言う意見が対立することになる、
そして対立が少し静まったところで艦隊副司令官の浅井少将が代案を提案した。

「かつては天津には大沽砲台がありましたが　もう数十年前に破棄され　現在天津には砲台が存在しません。　そこで私からの提案ですが、ここを戦艦　伊勢、日向　重巡洋艦　最上　三隈　古鷹　那智による艦砲射撃で支援すればいいのでは？」

そこに特殊装甲兵団団長の薬丸大佐が

「なら上陸は俺たちだけでいいだろう　航空支援も加賀の部隊だけでは火力不足なのは明らかだ。　ならいっそ俺たちだけでやるのが早い。」

この発言により　特殊装甲兵団のみを上陸させ　占領後に全軍を上陸させ北京近郊一帯を制圧するという作戦に決まった。

数時間

武尊は、要塞司令室で作戦の最終確認をしていた。

その時、突然扉がいきなり開き、見知った顔の人物が現れた。

「ああ、飛鳥先輩殿　」

そこに現れたのは伊勢艦長の飛鳥　仁少将であった。

「例の計画は、どこまで進みましたか？」

「伊勢の改修は間に合うが日向はダメだ、戦闘後に改修工事を行う」

「ああ、先輩、忘れていましたが、　例の兵器はどれくらいありますか？」

「一応確認したが八発だ、　しかしあれを使うには　現在開発中のあの艦しかないが、ま

さか、、」

「ええ、そのまさかです　あの艦の試験航海をしないといけないので」

この３日後の７月１９日　第一作戦が開始された。

第三話　対中戦２

１９３７年　７月１９日　正午　この日第五軍団所属の陸軍航空団第１　第２部隊と九州方面軍　長崎空港所属　大蘇我航空団第１１　１２　１３　１４　１５爆撃団が

黄海で空中集合した。　九六式陸上航空機　全１００機と第５軍部隊６００機　それに加え

赤坂謙信　武田信康が直掩につき後藤建夫が後方で敵増援の阻止　これが作戦の全容であった。

公開北部　目標より１００ｋｍ前の洋上で戦闘が行われた　日本軍６００機に対し中国軍総軍３４０機　その内７９機が爆撃機で１１３機が偵察機であり

実際に戦闘機として訓練を受けた機体は１４８機でそのほとんどが複葉機もしくはアメリカ　ドイツの旧式機であった。

さらに偵察機や爆撃機には機銃が搭載されていない物もあり、パイロットが拳銃を片手で持ち対抗しようとした。

しかし戦闘が行われてわずか五分で決着がついた。　中国軍機のほとんどは日本軍

より低空を飛んでおり、日本と同高度で飛んでいた
戦闘機部隊は、赤坂が率いた２００機と交戦し　性能　練度共に圧倒的不利な中国軍機が次々と落とされ　戦闘開始１分で１４８機全機が全滅した。
気づいていない１９２機は、武田率いる２００機による急降下攻撃により一方的に撃ち落とされ　結果日本軍直掩機　爆撃機に損害なく
中国軍機全機が喪失　事実上壊滅した。　同日１５時　１００機の陸上攻撃機が前線において爆撃をわずか１０分で行った。
約１００を超える爆弾が大陸と落とされ爆発する。　そしてこの爆弾による中国軍の被害は二万五千人の戦死と多く
対してこちらは偽の司令部　塹壕が丸々吹っ飛んだだけであり　むしろ殿を務めていた部隊の撤退させる時間を作り　撤退を成功に導いた。
この時の中国軍司令官　不幸「ブシン」はこの攻撃で日本軍か。自滅したと確信し、全軍を無理やり集結させ
満州首都である新京に前進した。　この時不幸は蒋介石に「あまりにも無謀すぎる、今すぐ軍を停止させ　待機せよ」と言われていたのに
「我が軍有利　前線に口を出すな！。」と言い通信を強引に切ってしまった。
蒋介石の考えは正しかった。　日本軍の作戦は敵を内側に引き込み　強襲上陸によ

る包囲殲滅が目標だった。
　これは蒋介石が戦争の名人であったから故にわかったことであり　各中国軍の指揮官には日本の自滅にしか見えていなかった。
　これが中国軍の第敗北の原因の一つであると後世の歴史家のほとんどが語る。しかし現在の状況では、
　敗北の危機に気づいているのは蒋介石のみであり　この時それ以外の中国軍閥の指導者　軍の司令官は日本への勝利したと言う
　事実に酔いしれ　、更なる勝利の美酒を飲むために蒋介石の発言を軽んじた結果　その先でほとんどの兵士が死んだのだから
　遺族にとってたまったものではない。
　中国軍が遼寧　遼東方面の要塞に接敵したのが１９３７年［東方3年］　8月3日のことである
　中国軍の不幸司令官が早急に全軍を移動させたため、補給の観点から行軍を遅らせることになり
　結果　日本軍の要塞はほぼ完成した状態で戦闘を始めることになった。
　中国軍の攻勢は初日から頓挫することになった。
　日本が遼寧　遼東方面に作った大要塞は単純に言ってしまえば、古代中国からある万

里の長城のようなものである
遼寧　遼東に作られた城壁　は５００ｃｍのコンクリートで出来ております　それが３重になっていて　　区画の一つが破壊されても
その区画ともう一つの区間の通路で殲滅し　破壊された部分を人員を使い修理するといった感じになっている
到底歩兵の装備で　この要塞に傷をつけられるはずはないのだが　不幸は、この時、入り口だったら絶対に破壊できるだろうと思い
第一陣　先方で到着した２師団二万五千人を突撃させた。
第一陣は勇敢に戦ったが、戦闘開始一時間で全滅した。
日本軍は城壁の上から九二式重機関銃の雨を降らせ中国兵に弾丸の雨を降らせ、後方から臼砲と野砲の全てを使い反撃した。
これにより中国兵は抵抗する間も無く消滅したのである
これにより前線にいた各参謀は不幸に対し撤退すべきと主張したが不幸は全軍を持って要塞を占領すると宣言し、
残りの予備兵力全てを前線に召集せよと伝え　作戦を考え始めた。
翌日　終結した全軍を率いて中国軍の突撃が始まった。　　その数２００師団　総勢２２５万名と　第一次約１００倍以上の戦力を投入した。

本来ならこの突撃でも日本軍の重機関銃部隊を総動員すれば殲滅は容易かったが、ここでとんでもない兵器が投入されたのである

その兵器はドイツ軍が中華民国に輸出していた一号　　ＩＩ号戦車である

ドイツはこの時　中華民国に試験兵器として　一号　２０両　二号　３両　を含め多数の武器を試験として中華民国に輸出していた。

この一号　二号戦車の攻撃により日本軍重機関銃部隊の攻撃を止めたことによりこの突撃は成功するかに見えた。

しかし、日本軍とて甘くなかった。　日本軍は制空権をすでに掌握しており　後方の臼砲に敵の位置を的確に伝え　戦車部隊を殲滅しようとした。

この攻撃はほぼ成功するかに見えた。

しかし次々と戦車部隊が臼砲の餌食になりながら　最後に残った二号戦車が意地を見せた。

この二号戦車の車長は、敵の要塞に突撃すれば城壁を崩せると思い、二号戦車を中央部に突撃、自爆した。

要塞自体が崩れることはなかったが　中央部の一区画に完璧に穴が空いでしまう事態となった。

なおこの攻撃で城壁内に駐屯していた二個大隊、６８名が炎の中に消えたのはいうま

い、

その結果、１００師団１１０万人の兵が突破口に突入した。　しかし、戦車の支援もなく突撃したため、約六割の６５師団６５万が到着前に

戦死するも、残りの四割が突入に成功しており、要塞内では激しい戦闘が行われることになる。

この要塞内での戦闘は苛烈を極めた。なにせ要塞の外壁を壊しただけであり要塞内にあるトラップなどはほどんと無傷であったからだ

結果的に突入した半数約２２万名がトラップにより死亡したとみられる。残りの部隊は日本軍と交戦したが

民兵で前近代的武器を持ってるものが結構いたためほぼ一方的な虐殺に近いことになっていた。

この２日間の戦闘で、生き残ったのは約１５万人　さらに生きて撤退できたものは約５万名で約４師団のみであった

不幸将軍はこの結果に困惑したが、日本軍の方も大損害を被ったに違いないと思い、

二日後の８月９日に全兵力をもって要塞を攻略すると宣言、各将校を抑え、作戦を開始しようとした。

作戦開始当日、敵からの砲撃が二日前から止んでいたため不幸ですら、おかしいと思

い始めていた。
しかし、敵の弾薬切れを起こしたと自分に言い聞かせ、作戦開始を宣言する直前、後方の伝令兵がボロボロになった状態でこちらに至急連絡があると言ってきたのだ。
仕方なしに作戦開始を一時中断して報告を聴きに行った。
「北京市が陥落し我が軍はすでに包囲されております」
この報告を聞き　不幸将軍は全て察した。　蒋介石が言っていたのはこのことだったのかと、
そして私は、敵に見事に嵌められてしまったのだと。
そしてこの数分後　中国軍にとって史上最悪な事態になることを、彼らはまだ知らない。